



開催地名：和歌山県由良町	
開催日時	令和2年11月1日（日） 9：45～11：15
開催場所	ゆらこども園
語り部	佐々木 守（岩手県釜石市）
参加者	由良町役場職員 50名
開催経緯	<p>当町では、実際に大規模な災害を経験したことが無いため、災害発生時には予想を超えた混乱が発生することが考えられることから、様々な対応力を身につける必要があると考えている。行政職員としてどのようなことを心掛け、何を優先すべきか整理する必要性から、今回の語り部講演を実施することとした。</p>
内容	<p>（1）震災における釜石市の被害状況</p> <p>震度5弱～6強を記録し、津波の最大高は推定30メートルのところもあった。人的被害においては死者888人、行方不明者152人で、家屋の損壊は市全戸の29パーセントに及び、産業については主要産業の漁業における保有漁船の被災が深刻で所有している漁船の約98パーセントが被災した。また、行政職員の災害対応についても、想定以上の被害状況も相まってほとんど機能しなかった。（ライフラインは全滅、庁舎は建物自体の倒壊もあって司令部として全く機能しなかった。情報収集も周知ができず、職員の数多くが被災、想定していなかった業務の対応等、とにかくマイナス要素ばかりで手の打ちようがなかったことが挙げられる。）</p> <p>釜石は三陸沿岸にあり、津波の常襲地帯とも言える。明治29年、昭和8年の津波でも、かなりの被害を受けている。その頃すでに、30年以内に宮城県沖地震が99パーセント発生すると言われており、その対策を行うために、私は防災課に配属となってすぐ、自主防災組織を海の近くのほとんどの地区に作った経緯がある。しかし、いくら行政が努力しても、住民自身が動かないと本当の防災活動はできない。住民の皆さんへの防災に対する意識付けをすることに努めた結果的には中途半端に終わり、結局は東日本大震災の前には役に立たなかったと言える。</p> <p>（2）震災から得た教訓</p> <p>上記の被害状況、犠牲が拡大した要因を細かく分析していくと、災害発生時の基本的な初動対応がしっかりとできていなかったことが判明した。今後同規模の災害が発生することを想定して、しっかりと取り組んでもらいたいと思っている。特に下記に挙げる動作や、意識づけが重要だと思う。</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 何よりも命を守ること、災害で死者を出さない、震災後も死者を出さないことに全力を尽くす。 ・ いつか来るではなく、今すぐにでも来るという備えが大切である。 ・ 津波対策としては、地震直後に逃げるということだけである。 ・ 自分で判断し、行動することが重要である。 ・ 想定は目安に過ぎない。想定外のことはいつでも起きる。 ・ 情報に依存しない。 ・ マニュアルよりケースごとに判断し行動できるようにする。 ・ 優先順位を決める。 ・ 普段から顔の見える付き合い（連携）を大切にする。 ・ 行政は全てに対応できない。行政に頼りきりではなく、自助・共助を意識した防災活動を行う。 ・ 過去の例に縛られない。 <p>(3) 私が伝えたいこと</p> <p>あの日、3月11日、市庁舎で勤務していた私は、何も食べることができず、寒さに凍え、三日三晩、何も情報がないまま災害対策本部で情報収集に追われていた。自分ではそのときの記憶がほとんどない。自家発電もない、備蓄もしていないという状況で、大変な思いをしたということ、特にトイレについては避難所では非常に重要度が高いということを感じたとともに、県は県庁から連絡してくるだけで全く頼りにならなかったということを感じている。この大震災を通じて皆さんに改めて伝えたいのは、災害時に最優先されるべきは、あくまでも人命であるということである。まずは自分の命、家族の命、周りの方の命の確保を念頭に考えていただきたいと思う。そして、災害を踏まえた教訓を語り継いでいくこと、単に経験で終わらせずに歴史として残していくことが重要であり、我々の使命だと考えている。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>実際に大震災を体験され、先頭に立って乗り越えられた方のお話は極めて価値がある。本当にありがたいお話だった。改めて大震災の生々しい現状を知ることができたと思う。</p>